

2011－2012 年度  
国際ロータリー第 2650 地区  
職業奉仕・社会奉仕合同講演会

「ロータリー運動における人生の真理の探究」  
～ロータリーの奉仕活動を通じて～

その 1：はじめに

その 2：ロータリーの魅力

その 3：ロータリー職業奉仕の歴史

その 4：ロータリーでいう職業奉仕

第 2640 地区パストガバナー 成川 守彦

2012・1・21

於：京都テルサ 大ホール

## その1：はじめに

わたしは無駄に この世に生まれてきたのではない  
また人間として生まれてきたからには  
無駄にこの世を 過したくはない  
私がこの世に生まれてきたのは  
私でなければできない仕事があるからなのだ  
それが社会的に高いか低いかなんか そんなことは問題ではない  
その仕事があるかを見つけ  
その仕事に精一杯の魂を 打ち込んでゆくところに  
人間として生れてきた意義と  
生きてゆくよろこびがあるのだ

相田みつをさんの詩です。

皆様は、このように考えられて、今のお仕事を選び、今のお仕事を続けられていることと思います。

りっししょうぐう

さて、「立志 照 隅」という言葉があります。「志を立てて 隅を照らす」と書きます。

これは、志を立て、自分のいる場所を照らす、ということです。言い換えれば、**その場になくってはならぬ人になる**、ということでもあります。

人間が「志」を立てるということは、いわばローソクに火を点ずるようなものです。ローソクは、火を点けられて初めて光を放つものです。

**同様にまた人間は、その「志」を立てて初めてその人の真価が現れるのです。**

すいせいむし

**志を立てない人間というものは、いかに才能のある人でも、結局は酔生夢死の徒にすぎないのです。**

(酔生夢死とは、酒に酔い、夢の中にいるような気持ちで、うかうかと一生を送ることです。)つまり **志を立てない人間というものは、いかに才能のある人でも、一生を何もせず無為に過ごす人にすぎないのです。**

では、志と野心の違いは、何でしょうか？野心というものは、つまるところ、**自己中心のもの**です。即ち、自分の名を高め自己の位置を獲得することがその根本動機となっているのです。

ところが**真の志**とは、**この二度とない人生をどのように生きたら、この世に生まれてきた甲斐があるかということ**を考えて、**心の中に常に忘れぬ**ということです。

という事は、結局、**世のため人のためにという信念がなくては、真の意味で「志」とは言い難いのです。**

此処に居られる皆様は**真の志**を持っておられると思います。

即ち、**世のため人のためにという信念**を持ってお仕事をしていると思います。

わたしは 無駄に この世に生まれてきたのではない  
また 人間として生まれてきたからには

無駄に この世を 過したくはない  
私がこの世に生まれてきたのは  
私でなければできない仕事があるからなのだ という**真の志**です。

皆様、「致知」という雑誌をご存知ですか？読まれている方もおられると思います。その「致知」2008年12月号からの紹介です。

とおい  
東井義雄さんという方が紹介されています。東井さんは、明治45年兵庫県に生まれ、昭和7年姫路師範学校を卒業し、故郷の小学校に勤務して以来その生涯を小中学生の教育に捧げた人です。その東井さんの講演録をまとめた著書が致知出版社から刊行されています。題して『**10代の君たちへ、自分を育てるのは自分**』。東井さんの教育にかける、祈りのような思い、深い心願が熱く伝わってくる一冊であります。

東井さんは、この本の中で、次のように語っています。  
人間は 五千通りの可能性を持って 生まれてくる。死刑囚になる可能性も 泥棒になる可能性もある。  
その五千通りの可能性から、どんな自分を取り出していか。  
「世界でただ一人の自分を、どんな自分に仕上げていくか。その責任者が自分であり、皆さん一人ひとりなんです。」

東井さんはこう繰り返し、「バカにはなるまい」という講演の中で、一人の知的障害を持った中学生の詩を紹介しています。

「私は一本のローソクです もえつきてしまうまでに なにか一ついいことがしたい  
人の心に よろこびの灯をともしてから死にたい」

この知的障害を持った中学生は、勉強はできないが、何か一ついいことをしたいと頑張っている。これが賢い生徒。

ところが、少し勉強ができてバカがいる。ある中学生が下校の途中、通せんぼをした保育園の幼児に腹を立て、刺し殺した事件が起きました。一度家に帰って刃物を持って引き返しての犯行。なぜ、やめとけとブレーキがきかなんだのか。彼は自分で自分を人殺しにした——東井さんは涙を流して悔やみました。

「自分は 自分の 主人公  
世界でただひとりの自分を 創っていく 責任者」 東井さんの言葉です。  
世界でただ一人の自分をどんな自分に仕上げていくか、その責任者は皆さん一人ひとりなのです。

人は何のためにこの世に生まれてきましたか。皆さんも考えたことがあるでしょう。食べるため、遊ぶため、そうじゃないですよ。人のために、世のために、自分を役立たせるために、この世に生まれてきたのです。

私は今、70歳です。70歳になりますと、これまでの自分の人生を時々振り返ります。“これでよかったのか”と、でもやり直しはきかない。これから先のことは計画できますけれども、過ぎ去ったことはもうやり直しがきかないですね。

皆さん、「クリスマス・キャロル」という本はご存知ですね。

ロータリーの 2001-2002 の RI テーマは、“Mankind is our business” **「人類が私たちの仕事」** でした。2001-2002 年度の RI 会長 リチャード D. キングは、2001 年国際協議会において、「ロータリーの仕事・・永遠の狭間で・・・」という講演で、チャールズ・ディケンズの人気物語『クリスマス・キャロル』から 次の言葉を引用しています。

**『仕事だって!! 人類が私の仕事だったんだ。 社会の安寧こそ 私の仕事だった。博愛、憐憫、寛容、慈善、このすべてが 私のなすべき仕事だったのに』**

欧米、特にキリスト教の世界では、子供の頃、クリスマスの季節になると、「クリスマス・キャロル」という本をお母さんに読んでもらったり、又、テレビや DVD で見ます。ですから、「人のために」という精神が欧米の人々の心の底深くに存在しているのです。

簡単にストーリーを話しますと、**エベネーザ・スクルージ**という初老の商人は、冷酷無慈悲、エゴイスト、守銭奴で、人間の心の暖かみや愛情などは、まったく無縁の日々を送っている人物で、隣人からも、取引相手の商人たちからも蛇蝎のごとく嫌われている。

共同経営者のマーレイに死なれて 7 年になります。そして、あるクリスマス・イブの夜、そのマーレイの幽霊が現れてこう告げます。

**「その強欲のまま死んだら、とりかえしのつかないことになる。これからおまえを救うため、三人のクリスマスの精霊が次々現れるから、しっかり言うことを聞け」**

やがて**第一の精霊**が現れます。それは「過去のクリスマスの精霊」で、スクルージの幼かった頃、そして青年になった頃の幻を見せます。父親に理解されなかった自分、いつも自分を愛してくれた妹、そして、底抜けに陽気な部下思いの親方、守銭奴のようにふるまうスクルージから涙ながらに去っていった恋人。今ではほとんど思い出さなくなっていた過去の幻に、スクルージは動転し、また喜び、長い間流さなかった涙を目に溢れさせます。

**第二は**「現在のクリスマスの精霊」で、スクルージの事務員であるクラチットの家へ連れて行きます。彼の一家が、貧しさに苦しみながらも、楽しく和やかにクリスマスを祝っている様子に心打たれます。しかし、彼らの団欒から、その一家にとり、自分は「鬼」以外の何者でもない知り、愕然とします。

**第三は**「未来のクリスマスの精霊」で、スクルージが死んだことを町の人が悲しみもせず喜んでいる未来を見せます。借金や利息を返さずに済む人は小躍りしています。何の関係もない人まで、この街から「強欲じじい」が消えたことを神に感謝しているようです。その上、自分の死体からめぼしい衣服を剥ぎ取って売り払っている者もいる様子です。

こうした幻をつぎつぎに見せられて、とうとうスクルージは、精霊の黒い衣服にとりすがり、声を限りに叫んでいました。**「この忌まわしい幻は絶対に変わらないものなのですか。それともこれからの心がけ次第で変えることが出来るものなのですか。もう私は以前のような私じゃない。どうかこの幻を変えてもいいとおっしゃってください」**

やがて、スクルージは目覚めて、自分が部屋に帰っていることを知ります。「朝だ！しかし、いつの朝だ？もうクリスマスは終わったのか？」

窓枠へ飛びつき、窓を引き開け、下を歩く子に話しかけ、スクルージは今がクリスマス当日だと知ります。

「クリスマス当日だって！！ありがたい！！その肉屋のでっかい七面鳥があるだろう。あれを家へ届けてほしいんだ。すぐ肉屋の人を呼んできてくれたら、君にはお駄賃を奮発するよ！！」

七面鳥を買い、クラチット家へ行き、彼には休暇を十分与え給料も上げました。町の人々へたくさんのプレゼントを用意したスクルージの姿は満足そのものでした。

スクルージにとって、生まれて初めての楽しいクリスマスが訪れました。

スクルージは、見違えるような慈悲深い人となったのです。

そういうお話です。だから、欧米の人々は生きている間、世のため、人のために奉仕をするという精神が非常に強いのです。

若い皆様はまだこれからいくらでも自分の人生を計画できます。ぜひ、しっかりした目標を立てて頂きたいと思います。

「自分は 自分の 主人公

世界でただひとりの自分を 創っていく 責任者」 です。

生も一度きり 死も一度きり

一度きりの人生だから 一年草のように 独自の花を咲かせよう

坂村真民先生の詩です。

**世のため人のために という真の志**を持って 一年草のように 独自の花を咲かせて下さい。

改めまして、前置きが大変長くなりましたが、先程ご紹介いただきました2640地区の成川でございます。この度、素晴らしいロータリーの指導者が大勢おられます当第2650地区の**職業奉仕・社会奉仕委員会 合同講演会**でお話を出来ます事は、私にとりまして大変光栄であると共に、重責を感じております。

今西信裕ガバナー様を始め、ロータリーのシニアリーダー、地区役員の皆様の前でその責任を果たせるかどうか不安であります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

僭越ながら今日は、「**ロータリー運動における人生の真理の探究**」～ロータリーの奉仕活動を通じて～という題でお話をさせていただきます。

最初にお断りしておきたいのですが、私が今日お話する内容は、ロータリーの先人達がこれまで述べられてきたことを、私も同じように考えるが故に、皆様にお伝えするのでありまして、決して全て私が考えたものではございません。ご了承下さい。

お手元のレジュメにございますように、これから；

その2：ロータリーの魅力

その3：ロータリー職業奉仕の歴史

その4：ロータリーでいう職業奉仕 と順に、話をさせていただきます。

今日の話は、どうか「**こういうロータリーもあるのだ。**」という受け止め方でお聞き頂きたいと思います。

ロータリーは、決してロータリアンに対して、殉教者になれという様な悲壮な決意を求めているものではありません。あちらも立ててこちらも立てよう、という様な、**極めて曖昧で平凡な、そして善良な市民の運動**であります。だからまた、職業分類という一応の枠組みはあっても、出来るだけ多くの人に参加してもらう所に意味があるのではないのでしょうか。

少数の畏敬すべき殉教者を作るのではなく、**出来るだけ多くの「よりよい職業人」を育て、それによって「よりよい社会を作ろう」というのが、ロータリーの道**であると思います。

<ポール・ハリスは>

「人の考えは十人十色だから、独断的にロータリーはこうだと決めつけることは無益だ」

「一種類の花、1つの色ばかりの花壇に何の面白さがあるろう。色々あってこそ人生に薬味がきく」と言っています。

ロータリーは、金太郎飴のように、どこを切っても同じ構造というものではありません。

**ロータリアン、一人一人のロータリー**があると思います。

それでは、先ず、「ロータリーの魅力について」お話させていただきます。